

報告——遠藤文学原点の旅

東京下町に遠藤文学を訪ねて

雨・府中カトリック墓地・浅草界限・屋形船・そして人生

ツアー初日は観光バスに乗って

5月24日朝10時、周作クラブ一行38名を乗せたバスは、東京駅を出発。加賀乙彦周作クラブ会長から、「あいにく今は雨が降っていますが、お墓参りは雨の方が情緒があつて良いでしょう」というご挨拶、また加藤宗哉周作クラブ幹事から、「やはり遠藤周作は雨男。しかし、ある映画監督と対談し、映画監督は雨男という評判が業界に立つと仕事が来なくなる、という話を聞いてからは、自分は晴れ男だと折りにつけ言うようになった」というエピソードも紹介されました。バスは順調に走り、1時間ほどで遠藤先生のお墓のある、府中カトリック墓地



墓前に献花 加賀会長

へ到着。墓誌には、遠藤先生とお母様の郁さん、お兄様の正介さんの横に明栄さんという見慣れぬお名前が。この方は、遠藤先生の長兄にあたる方であまり知られていませんが生後すぐ亡くなられた方だそうです。やはり百聞は一見にしかず、の諺どおり「原点の旅」に参加すると、このような驚きが必ずあります。遠藤先生のお墓は黒御影石、思っていたほどは大きくなく、程よく周囲と調和していました。参加者一人ひとりが献花をしてお参りした後、各自が自由に墓地内を探索。哲学者で遠藤先生が学生時代入寮していた白鳩寮の舎監であった吉満義彦氏のお墓、真正会館の前身聖フキリツポ寮の創設者、岩下壮一神父のお墓などを探し当て、それぞれの思いで手を合わせました。墓地全体の敷地は、きちんとした長方形で、想像していたよりも狭く、整然と植えられた赤いツズジと黄色のキンケイギクが美しくアクセントをつけていました。墓地に立つキリスト像の数よりも、マリア像の方がかなり多かったことも印象的でした。

お昼は墓地内の休憩所で豪華なお弁当を食べながら歓談。まだ降り続く雨の中をバスを止めるのは困難な道路、ご近所に住む加藤幹事が「時々散歩に来るが、観光バスで来るような所ではない」と発言されバス中大笑いとなりましたが、この日のバスガイドさんは優秀、よく歴史の予習をされており、更に周作クラブ会員で城に詳しい木村勇さんと二人が世田谷城址の歴史を説明してくれました。



木村勇さん(写真左)の解説で城址を見学

説明が終わる頃にバスは世田谷城址に到着。遠藤先生が『埋もれた古城』に書いている通り、わずかに土塁と空堀がある程度の城址ですが、ひっそりと、何ともいえない「雰囲気」を醸し出していました。予定より早く旅が進んだので、城址公園の隣にある豪徳寺も訪問。雨のためか江戸時代に迷い込んだような、重厚な古刹の佇まいを見せていました。

豪徳寺は「招き猫発祥の地(異説あり)」として有名で、境内には100体以上の招き猫が奉納されている棚があり、なかなか壮観でした。

豪徳寺から首都高速経由で浅草へ。途中、隅田川河畔にある創業享保2年(1717)という、長命寺「桜もち」で有名な山本屋さんに寄りました。普通の桜餅は餅1個に桜の葉1枚ですが、山本屋さんののは3枚の葉で包まれ、重厚な感じ。今も心地よい香りが甦るような、一個200円、お値段相応の桜餅でした。車中で桜餅を食べながら、遠藤先生の愛した「浅草ビューホテル」へ移動。旅行社の方から「今日は大相撲が千秋楽。ビューホテルでは九重部屋の打ち上げパーティーがありますが、そちらに行かないように」という注意がありました。加賀会長から「そちらにも行きたいなあ」というご希望も出ました。ホテルに着くと既に、噂の九重部屋の力士たちが何人かおり、ちよんまげ姿に鬘付け油の匂い。ただよわせ、浅草情緒を深めていました。



浅草寺にお参り

夜は懇親。パーティー

6時から3F・祥雲の間で、懇親会に先立ち1984年にNHKで放送された「遠藤周作 訪問インタビュー」ああ灘校まぶしき母校」を20分ほど見ました。当時61歳の遠藤先生は大変お元気で肌つやもよく、番組の中で「なんの意図もな



三田神社の三角鳥居

く怠けていた学生だった」と、ぐうたらだった灘中時代を幾度となく振り返っていました。狐狸庵節も随所に登場し、参加者達からも時おり大きな笑いが出ました。

番組が終わると懇親会の始まり。司会の高橋千劍破周作クラブ幹事（懇親会から参加）のご指名で挨拶に立たれた遠藤順子夫人は、雨の中、府中カトリック墓地へのお参りに感謝の意を述べられたのち、「浅草ビューホテルで一番の思い出は、主人が元気な頃、隅田川の花火を観ようとこのホテルに部屋を取った時のこと。ホテル側も気を利かして、二十何階か非常に眺望の良い部屋を取ってくれたのですが余りに高すぎ、花火を見下ろす形になってしまった。しかも少し距離があり、花火の音も聞こえず、上から観る花火の味気なさを初めて実感しました」

この話に、また大爆笑。当惑する遠藤先生の顔が目につかびました。続いて加賀会長の乾杯の音頭。その前に一言。

「最近の灘高校の様な優秀な高校から東大に入って来る学生は非常につまらない、遠藤氏がいらした頃の様な機知に富んだ楽しい学生がいなくなりました。これは、皆が同窓会等で異口同音に話している」

という内容のお話し。知識の詰め込みの中に閃きが埋没してしまった現代の教育の一面を、加賀会長の視点から鋭く考察したものでしょう。

懇親会では、遠くから、又は初めて参加された方のスピーチもあり、現在上智



懇親会に参加された方々

大学に留学中のポーランド人女性ユステイナ・カシヤさんが流暢な日本語で、遠藤周作を研究していると話し、激励の大きな拍手を浴びました。和やかに時は流れ、2時間ほどでおひらきとなり、その後は最上階のバーでの二次会あり、部屋に帰り即就寝あり、どこかの部屋に集まり個人的に三次会を開くグループや、宿泊せず帰宅する東京周辺からの参加者等、多種多様でした。

2日目は朝から晴天に恵まれ、遠藤先生がお正月に好んで歩いたというコースを辿りました。浅草寺をお参りした後、待乳山聖天へ。江戸時代は隅田川を走る船のうえから、小山のようによく見えたとか。聖天様の境内も、粋な江戸っ子たちが吉原へ通った往時をわずかながら偲ばせる場所でした。薄青色のアジサイの咲く隅田川のほとりを歩き、川を渡れば俳人の碑の多い三田神社。三井家との関係も深く、雨乞いに利益があるという境内には、三角形の鳥居があるなど静けさの中にも威厳が漂っていました。

旅のフィナーレは屋形船で

隅田川のほとりを徒歩で移動し、吾妻橋のたもとの「あみ清」から屋形船で船上懇親会へ繰り出しました。天ぷら、刺身、鮎等など食べきれないほどの料理に舌鼓を打ちながらの川下り。東京湾、お台場近くまで行き、遠藤先生のご長男、龍之介さんが勤めるフジTVのユニークなビルの近くを通ります。加藤幹事が「皆が働いている昼間から優雅に屋形船で酒を呑む。これぞ狐狸庵流」と話され、思

い思いに杯を傾けました。加賀会長は「あみ清ワイン」がお気に召し、船中のワインを独占なさいました。2時間余りの船旅でした。



屋形船上で楽しい会食（撮影：編集部）

今回の旅を振り返り、江戸情緒が残る浅草界隈を堪能できたこと、遠藤先生の感性にまた触れられたことに感謝と喜びを感じました。年齢性別職業肩書きに関係なく、ざっくばらんにいろいろな人が出会い「生活ではなく、人生を楽しめる」時間を持てたのは、まさに狐狸庵流、遠藤先生のお導きと感じました。

（記）太原正裕 城西大学准教授

編集部注——今回のツアーでは2日間の行程のうち、どの部分へ参加するかは選択は自由でしたから、その時どきで参加者の人数に変化がありました。明細・初日のバスツアー（東京発）38名、現地合流3名、合計41名。パーティー47名。2日目の浅草散策37名、屋形船42名、参加者の総数は57名でした。

（写真）梅田和子 周作クラブ長崎